

()

〔A〕の文章は吉田兼好の『徒然草』と、その現代語訳である。

〔B〕の文章は本居宣長による〔A〕の見方、感じ方に対する批判文である。(『玉勝間』)

〔A〕〔B〕を読んで後の問いに答えなさい。

〔A〕

花はさかりに、月はくまなきをのみ、見る物かは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、猶あはれに、なさけ深し。咲きぬべきほどの木末、散りしほれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の事書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「障ることありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことに頑なる人ぞ、「この枝、かの枝、散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。

よろづの事も、始め終りこそおかしけれ。男女のなさけも、ひとへに逢ひ見るをばいふ物かは。

(『新日本古典文学大系39 方丈記 徒然草』より抜粋)

〔A〕の現代語訳

(桜の)花は満開であるのを、月は一点の曇りもないものだけを見るものだろうか、いや、そうではない。(降っている)雨に向かつて月を恋い慕い、簾(すだれ)を垂れた部屋に引きこもって、春が暮れていくことを知らないのも、やはり、しみじみとした感じで、趣が深いものだ。今にも咲きそうなるあいの桜の梢(こすえ)、花の散りしおれている庭などこそ、見る価値のあるところが多い。和歌の詞書(ことばがき)にも、「花見に出かけましたところ、もつすっかり散ってしまったので(詠んだ歌)。」とも、「差し障りが出て出かせませんで(詠んだ歌)。」なども書いてあるのは、「花を見て(詠んだ歌)。」と書いてあるのに劣っているだろうか、いや、劣っていない。花が散り、(また)月が西に傾くのを惜しみ慕う世の習わしは、もつともなことであるが、なかでも特に、ものの情趣を解さない人が、「この枝もあの枝も(花は)散ってしまった。もつ見るだけの値打ちもない。」などと言つよつた。何事も、始めと終わりがことに面白みがあるものなのだ。(以下略)

[B]

兼好法師がつれづれ草に、「花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは」とかいへるは、いかにぞや、いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには、風をかこち(*)、(1)月の夜は、雲をいとひ、あるは待ち惜しむ心つくしをよめるぞ多くて、(2)こころ深きも、(3)こころなる歌(*)に多かるは、みな花はさかりをのどかに見まほしく(*)、(3)月はくまなからむことをおもふ心のせちなる(*)、(4)からこそ、さもえあらぬを歎きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲を願ひたるはあらん。さるをかの法師が言へることくなるは、人の心にさかひたる、後の世のさかしら心の、つくりみやびにして、まことのみやび(5)にはあらず。かの法師が言へる言ども、此(6)たぐひ多し。皆同じ事なり。すべてなべての人の願ふ心にたがへるを、みやびとするは、つくりことぞ多かりける。恋に、逢へるをよむ(7)ぶ歌は、こころ深からで、逢はぬを嘆く歌のみ多くして、こころ深きも、逢ひ見むことを願ふからなり。人の心は、うれしき事は、さしも深くはおほえぬものにて、ただ心かなはぬことぞ、深く身にしみてはおほゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には、心深きはすくなくて、心かなはぬすぢを、悲しみ憂へたるに、あはれなるは多きぞかし。然りとて、わびしく悲しきを、みやびたりとて願はむは、人のまこと(8)の情ならめぢ。

(注)

- * 1 「風をかこち」…… 風を嘆き
- * 2 「さる歌」…… そのような歌
- * 3 「見まほしく」…… 見たい(と思ひ)
- * 4 「せちなる」…… きわめて強い
- * 5 「まことのみやび」…… 本当の情趣・風流を解する心

『日本思想体系40 本居宣長』より『玉勝間』四の巻 に準拠した)

- 問一 傍線部 について、「男女の恋」とはどのようであれば恋の情趣を解するものと言えるか。「A」の筆者の考えに則して述べなさい。
- 問二 傍線部 を「A」及びその現代語訳を参考にして現代語訳しなさい。
- 問三 「B」は「A」をどのように批判しているのか、「つくりみやび」「人のまことの情」の二語句を用いて二六〇字以上二〇〇字以内で述べなさい。
- 問四 あなた自身は「桜の花の見ゆ」をどのように考えるか。「A」「B」を踏まえて二五〇字以上三〇〇字以内で述べなさい。